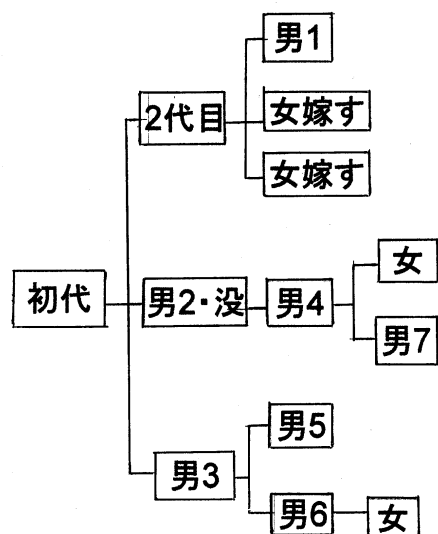


町衆が消滅する過程を実例で追ってみよう。

四條町367番地本籍家系



2代目と弟二人(男2、3)はこの居宅で生まれ育った。初代は昭和19年度(1944)に四条町の町内会長になった。任

その後の京都は西陣織や友禅染に代表される伝統産業の衰微が著しく、室町筋の繊維問屋街も空きが目立っていたが、バブル景気の崩壊とその後くり返した景況悪化で367番地借家人の白生地商が平成8年(1996)に倒産した。2年ばかり空き家のままで経過したが、老朽木造家屋を空き家にしておく不安で、年間50万円近い固定資産税分でも償えればと、暫定的に鉄骨RC造りの集合住宅を建てて現在に至っている。2代目は移転後も四条町の一家主として町内会員であり、男1は367番地の経緯をよく理解し、継承する意思を持っているが、次の世代は(いずれもまだ未成年だが)、女儿がいずれ婚姻で本籍離脱が予想されることを踏まえれば、男7一人である。男7は誕生時点から東京近郊に住み、京都には祖父の墓参以外に接点が無い。今後367番地を本籍地とする一族から四条町の町衆が育つ可能性は極めて小さいと言わなくてはならない。